

翌年の三月には弘子と田代の結婚式があったが加代のところへは連絡がなかった。五月の初めに浩史が生まれたのだが当然ながら加代の身内へは知らせ辛かった。だが叔母の正枝はどこからか聞きつけ、祝いの品を持って来てくれた。

その折の話によると、憲志の代わりに田代が保証人を引き受けたという。そのあと仕事のほうは、最初に考案した遊戯機はヒットして儲けたが、二機種め以降の機械は売れ行きがかんばしくなかったらしい。東京の販売会社が大量に発注したにもかかわらず、売りさばけず、仕掛品も含めて相当の台数が父の工場に積まれたままになっていったという。

そのうち、販売会社は手形の不渡りを出し倒産した。父の会社は売掛金、受取手形とも入金せず資金繰りに四苦八苦だったという。ずいぶんあとになって販売会社の整理が行われ、僅かばかり残った資産で債務の清算がされたらしいが、父の会社には無いに等しいほどの些少の額が支払われたそう。馴れ合いの取引だったので、相手を信用しすぎたと、弘子が正枝に悔やみごとを言ったらしい。弘子は夫婦で実家に同居していたので、家庭内の揉めごとまでも折にふれ正枝に相談しているらしくかった。

次の土日は託児所のクリスマス会が三日後に迫っていて準備のため休日出勤をした。正枝への電話は気にかかりながらも延び延びになった。クリスマスのあとは年末の雑事に追われて一週間があっという間だった。二十九日に全員で大掃除、三十日の午前中は佐知子と加代だけ年始の用意のため出勤した。

仕事納めを済ませアパートに戻り着くと二時過ぎだった。前の道路に珍しく車が二台、通行の邪魔にならないようにブロック塀すれすれに沿わせて停めてある。だ

れも乗っていない。さして気にも留めず加代は二階にあがる。部屋のドアの前でバツグから鍵を取り出し、あたりをうかがう。女の一人暮らしは物騒だからあける前に周囲を見渡す習慣になっている。

加代は念のため向かいの道路にも目をやった。そのときブロック塀の向こう側を若い男性の後ろ姿がさっと横切った。短く刈った頭髮、背が高い。黒いジャンパーを着ている。

“あつ、浩史！ 帰ってきたの……”

加代の目は一瞬、輝いた。

男性は道路わきに停めてあった車に乗り込んで、あつというまに走り去った。

人違いだ。あの子がここにいるはずがない。頭の中がどうかしている。加代はそつとため息をつく。

加代がさきほどそこを通ったとき、あの車は確かにあったが歩いてくる人影は見かけていない。その若い男性はふって湧いたように現れている。納得がいかず、なおも見おろしていると、空き家の建物の裏手からぬっと中年の男が姿を現した。男は足早に道路を横切り、停めてあったもう一台の車に乗った。察するところ、どうやら不動産屋が客を連れて物件を案内していたふうな感じだ。

やっと部屋に入り一息入れてからパソコンの前に座った。着信を調べたが何も入っていない。今年も残すところあと一日だ。今日中に年賀状を仕上げ、ポストに入れて行かなければならない。筆王というソフトは年末だけに使っているのでそのたびに苦労する。用意していた官製はがきを出し、スタート画面を開き作業を始めた。すべてを印刷し終わると、時計は夜の十時を少し回っていた。

大晦日の朝九時頃、年賀状を出しに自転車でポストまで行き、その足で諏訪神社へ回った。ときおり雲間から薄日が射してすっきりしない空模様だが先週ほどの寒さではない。数分、ゆっくりペダルを踏むと体が温まってきて気分は爽快になった。境内は驚いたことに仰々しい雰囲気にも包まれていた。元日を迎える準備がすっかりできあがり、拝殿の横手に特設のテントまで張られ、世話人らしい年配の男性たちが忙しげに出入りしている。年越し行事のようだ。

夜中ちかくなると連れだった地元の参拝客で狭い境内が混みあうのだろうか。加代は自転車をユーザーンさせてすぐにまた乗る。

加代は月に一度ぐらいここへお参りに来るが、休日の昼間はひと気もなく石畳には枯れ葉がやたらと散らかり、拝殿は閉まっている。そういう日のほうがよそ者には似つかわしい。加代はとりたてて何を祈るというでもなく、閉ざした格子戸に向かって手を合わせる。そのあとは、こんもりと繁る木々のなか、木漏れ日を仰いだり狛犬のひんやりした足を撫でたりしてしばらくの時間を過ごす。これが加代のいつもの参詣だ。

しかし今日は鳥居のところで踵を返した。神様がどこから自分を見ていて、くすつと笑みを洩らしクスノキの梢を揺すっている。加代はそんな気配を背に感じながら社をあとにした。

夫が生きていた頃、元日は暗いうちから車で屋島山上にあがり初日の出を拝んだものだ。しかしこのアパートに来てからは真冬の朝日とは縁がない。建物が北向きに建っているので、二階の窓から上半身をのり出しても日の出は見えない。

高松市は瀬戸内海に面しているから、ここから五、六キロメートル北へ向かっていけば否応なしに海に出る。海岸は埋め立てがすすんでいるので先端まで道がある。自転車でもたやすく行けそうだ。海から昇る太陽が見られるのか、いや、東にある半島が日の出の方角なのかもしれない。

浩史は中学生の頃、友達と高松漁港の岸壁でよく釣りをした。加代も一度だけ付いて行ったことがある。小アジや鯖の収穫があり翌日食べきれなかったのを覚えている。少々寒くてもあそこへ行ってみよう。加代はそう思ったって、厚手のコートや懐中電灯を玄関の下駄箱の上に並べておいた。

ところが暗くなってから雨がぱらつきだした。上空に低気圧がやって来て明日は荒れ模様になるとテレビの天気予報がながれた。夜になると風が出てきた。元日は朝から冬の嵐になってしまった。関東地方はまずまずの天気らしい。昼すぎに加代は浩史に電話をしてみたが、留守番電話になっていたのでメッセージを入れておいた。

一月の半ばから向かいの空き事務所では改装が始まり、外壁の塗装や屋根の葺き替えにひと月あまりかかった。目障りだった庇は壁と同じアイボリー色の建材で覆い隠され、あの木造が…と目を疑いたくなるほど洋風な感じに生まれ変わった。

やがて新しい入居者がやってきた。黄色い大判パネルの看板には、「ニチシンパソコンサービス」と書かれている。パソコンを扱う専門店だ。入り口のガラスドアと窓ガラスいっぱいの特価品の値段を書いた貼り紙。カラーの大きな文字で、パソコン教室という表示もある。店内の棚には商品の機器が並んでいる。意外に若いようだが、店主らしい男性が棚の間をちらちらと動いているのが見えた。

三月に入り日は大分長くなったが、加代が仕事を終えて宮の森駅に戻りつくのは七時ちかいので辺りはもう暗くなっている。パソコン店には煌煌と照明が灯り、その明かりが以前のように店頭から道路までを浮かびあがらせ、そこにさしかかると加代の足の運びはこころもち遅くなる。開店早々の店内について視線が向くからだ。加代の家にパソコンは置いてあってもたまにしか使わないので、今のところは、この店で買いたいものは考えつかない。それなのに店のようすがなぜか気にかかるので自分でも首を傾げたくなる。

それでも一日また一日と時が経って見慣れてくると、開店当初の物珍しさが薄れてきた。しかし加代は通りすがりでは死角の位置にあるカウンターが気になりだした。一見したところ、まるで無人の店みたいだがそんなはずはない。もしドアを押して開けてのぞけば、パソコンのキーを叩きながら店主が独りそこで店番をしているのだろうと加代は想った。

店の掲示物には金銀のモールをあしらったのも目につくが、何だか物足りない。新店にしては華やかさが感じられない。そうだ、壁を見渡したところでは、開店祝いの花輪が一つも飾られてない。店主にはお祝いをくれる人がいないのだろうか。

考えてみれば去年、浩史が会社を辞めて独立した折には加代は親なのに気を揉むばかりで手をこまねいていた。マンションの一室が仕事場に变身してフリーの映像クリエイターが誕生した、それだけのことだと本人が言うので加代は何のお祝いもせずじまいだった。

立春以後、少しずつ寒さが和らいでいたのに、月が変わったとたんまた冬に逆戻りしてきたようだ。土曜日は仕事が休みなので朝はゆっくりして九時頃になってやっ

と起きた。前夜は気温がかなり下がったらしい、台所のガラス窓の内側がうっすらと湿っている。

遅い朝飯を食べてから天気具合でも見ようかと北の部屋の大きな窓へいく。厚手のカーテンを左右に押し分け、摺りガラスの窓も開け放す。さっと流れ込む冷気に逆らって空を仰いだ加代は思わず目をみはった。春の雪だ。薄く白いものが曇った天のどこからともなく舞い降りてくる。香川は温暖な土地だ。積もるほど雪が降るのはまれで、この冬も数回ちらついただけであった。この時期、雪とは珍しい。加代は思わず片手を外へ突き出し、しばらく掌をかざす。小雪は疎らで微かな風に追われてすり抜けていく。

ふっと視界の隅で何かが動いた気がした。視線を落とすとパソコン店の店主がちょうど出勤してきたところのようだ。建物の横に車を止め、ダンボール箱を大事そうに抱えて降りてくる。加代は冷たくなった手を慌てて引っ込めた。

(以上12月12日放送分)